

【第六九回研究例会 〈怪異の聞き方 書き取り方―(口承)研究の視点から〉】

江戸期の転生騒動にみる〈怪異〉の聞き方・書き取り方の諸相

今井 秀和

一 勝五郎の転生騒動

江戸後期、武蔵国の少年「勝五郎」をめぐる転生譚が江戸の知識人たちの関心を集めた。しかし、転生を遂げたという少年に直接の聞き取りを試みる者、反対に頑として面会を拒む者など、彼らの態度は一定ではなかった。また勝五郎自身も、自然に語る場合と、語りを拒む場合とがあった。本稿では、こうした〈怪異〉の聞き方や語り方、書き取り方(記録の仕方)の諸相が示す意味に迫る。

とくに考えてみたいのは、以下の二点である。まず一点目は、〈怪異〉をめぐる問題意識について。これまで筆者は勝五郎の転生譚に関する複数の論考を発表してきた。⁽¹⁾その際には関連資料に内包される様々な人々の、様々な姿勢に基づく言説を並べた上で、総体としての「勝五郎の転生譚」を措定し、これを分析の枠組みとしての〈怪異〉に収まり得るものとして捉えてきた

ことになる。

本稿においても引き続きそうした姿勢をとるのであるが、当時、多様な価値観に基づいて肯定や否定など複数の異なる認識で捉えられていた勝五郎の転生を一口に〈怪異〉として括することの意味と妥当性について、あらためて考えておきたいのである。そこで、当時の資料から抽出可能な、この噂に直接間接に触れた人々の多様な価値観を踏まえた上で、筆者を含めた現代の研究者自身が分析に向かう立場も含めて、〈怪異〉をめぐる問題系についての若干の整理を行うこととする。

二点目の問題は、勝五郎の自発的な語りが、様々な聞き手の存在によってときに導かれ、あるいは閉ざされ、また開かれていくという、語りおよび聞き取り、書き取りをめぐる問題である。この問題についても、現代的な研究の視点を交えつつ考えていきたい。そして、一点目の〈怪異〉をめぐる問題と、二点目の語りと聞き取りの問題は、少なからず交差してくることになる。

本論に入る前に、対象とする「勝五郎の転生譚」について、基本的な情報を確認しておこう。江戸後期の文政五年(一八二二)のこと、武蔵国多摩郡中野村(現・八王子市東中野)の百姓源蔵の倅で八歳になる「勝五郎」という名の少年をめぐる転生の噂が世間を騒がせるようになった。

勝五郎の語りによれば、彼の前世は、中野村と同じく武蔵国多摩郡にある小宮領程窪村(現・日野市程久保)にいた藤蔵で

あった。藤蔵は六歳の時に疱瘡にかかって死んでしまい、その後、源蔵方へ生まれ替わったというのである。この話を聞いた祖母が勝五郎を連れて程窪村を訪ねると、藤蔵の親は実際に存在していた。それだけでなく、勝五郎の語る前世の景色などの記憶が、事細かに現実と一致していたことも分かったのである。藤蔵を亡くした家では驚きを以て勝五郎を迎えると、これを機として両家は近しく付き合うようになった。

程なくして勝五郎の一件は武州のみならず江戸においても知られることとなった。そして、いち早くこの噂を聞きつけた因幡国鳥取藩支藩（のちの若松藩^{わかさ}）の藩主を隠居した池田冠山が、直接勝五郎のもとを訪ねて来ることとなるのである。元藩主がとった異例の行動の背景には、幼子の死をめぐると一つ一つの悲話があった。冠山には露姫という、非常に賢い愛娘がいたのだが、六歳の時に疱瘡で夭逝していたのである。諸々の状況証拠から鑑みるに、冠山は露姫と同じような境遇（疱瘡にかかっての、六歳での死）から別の人間に転生を果たしたという勝五郎に、強い興味を抱いたものと推察される。

次第に大事になってきた為、中野村知行の旗本、おかどでんばちろう多門伝八郎としては無視するわけにもいかなくなり、当事者達に聞き取り調査を行った上で公式の文書を作成すると、御書院番頭に届け出た。さらに、幽冥界の探求に血道をあげていた平田篤胤はこの事件を細かに取材し、『勝五郎再生記聞』をまとめるに至った。

二 日野市「勝五郎調査団」の活動

さて、ここで一度、話を現代の勝五郎研究の最前線に移すこととしたい。一見、場違いな寄り道に見えるかもしれないが、現代の研究シーンの紹介および考察は、本稿の後半において述べようとしている、江戸期の〈怪異〉と向き合う現代の研究者の姿勢に関わる重要な問題にもなってくるのである。

近年、勝五郎の転生譚に関する新たな資料発掘や、勝五郎および藤蔵の係累の人々も能動的に関わっての八王子市・日野市界隈の現地調査が進んでいる。こうした成果は、「勝五郎生まれ変わり物語探究調査団」（以下「勝五郎調査団」という、日野市民をはじめとした一般市民および研究者の集まりによって蓄積されてきたものである）。

勝五郎調査団は日野市郷土資料館を活動の拠点として、二〇〇六年に同館学芸員および日野市民を中心に結成されて以降、八王子や日野に伝わる勝五郎転生譚の調査研究および広報活動を行い続けている（二〇一三年以降、筆者も調査団の末席に名を連ねている）。

勝五郎生誕二〇〇年に当たる二〇一五年には、企画展の開催および報告書の発行などが行われた。^②報告書においては、たとえば次のような新発見について記されている。小泉八雲が「勝五郎の転生」を執筆する際に用いられたという江戸期の写本『椿

『説集』は、長くその所在が不明であった。しかし、調査団の地道な探求により、同書が國學院大學図書館の寄託資料を経て所蔵資料となった『珍説集記』であることが明らかとなったのである。

同書の解題と、関連部分の翻刻も収録されているこの報告書が明記しているように、『珍説集記』所蔵元に関する情報が調査団の中川和明によって齎された後、具体的な資料調査については北村澄江が行い、翻刻は小宮豊・大河内祥行が担当している。同書の発見から具体的な調査、そして翻刻に至るまでには、勝五郎調査団内で培われた協力体制が活かされている。

こうした勝五郎調査団の活動には、次のような特徴がある。まず興味を惹くのは、生まれ変わる前の勝五郎、いわば「プレ勝五郎」たる藤蔵の家系の子孫および、勝五郎の家系の子孫の双方が在籍しているという点である。これは、『勝五郎の転生譚』が極めて在地性の強い江戸期の世間話および後世の伝承であることにも深く関係している。伝承のお膝元に住む新旧の住民たちの理解および積極的な協力があって、調査団が活発な活動を行えていることが理解されよう。

次の特徴としては、地の利を活かした、勝五郎の生まれ変わりという地域の伝承の語り継ぎをあげることができる。具体的には、地域の小学校などをまわったの紙芝居の実演や各種イベントなどにおける一種の「再話」、大人を主たる対象として毎年複数回開催されている、外部講師を招いての講演会などを通し

て、一時は日野・八王子両地域から忘れかけられていた在地の物語が語り継がれているのである。

また、勝五郎が大人になって以降の足跡の調査や、勝五郎、藤蔵の家族のその後の動向に関する文献・実地調査の継続もまた、いわゆる研究者単独では中々行えない、また、進んで行おうとしない方向性を有した調査である。転生譚を生み、擁し、語り継いでいた人々が、その渦中だけでなく前後において、どのような日常生活を行ってきたのかについては、これまであまり調査研究の対象とはなってこなかった。しかし、勝五郎調査団においては、地域住民のマンパワーを活かした地道な調査が継続して行われている。

言ってしまうと、こうした地道な調査活動は、「勝五郎」というワンテーマの周辺情報をローラー作戦で洗っていくこととすることそれ自体が一つの目的なのであり、そこには大上段に構えた「研究」的な、確固とした目的意識が存在しない。だからこそ、明確な目的意識を持って行われるタイトな研究が無意識のうちに見落としがちな観点に対する、ある種の問い直しとしての意味が含まれているとも言える。報告書のあとがきにおいて、日野市郷土資料館の北村澄江は以下のように述べる。「勝五郎を巡る家族の調査はまだ道半ばですが、勝五郎が決して特別な人だったわけではなく、普通の人として、普通の人生を懸命に生きた人だったことが、見えて来たのではないかと思います。」

すなわち、勝五郎の転生譚を現代的な研究の視点から〈怪異〉

として把握するにせよ、「勝五郎の転生」という非日常的なトピックを内包した勝五郎・藤蔵の家族や周囲の人々の生活史それ自体は、決して《怪異》に彩られるだけのものではなかった。むしろ、近世から近代にかけての地域史や家族史として考えた場合、極めて一般的、日常的なものであったという、ともすれば軽視されがちな事実がそこにあることを、調査団による丹念な調査の継続は浮き彫りにしたのである。

加えて勝五郎調査団は、関連資料の発掘においても少なからぬ成果をあげている。先述したような、小泉八雲が勝五郎に関して記した際の情報源とおぼしき『珍説集記』（國學院大學図書館蔵）の資料的価値の発見以外にも、勝五郎自身が平田篤胤から『勝五郎再生奇聞』の写本を送られていたという新たな事実を記した『小谷田異童傳』（府中市郷土の森博物館蔵）の発掘など、調査団の活動によって関連資料が続々と発掘されているのである。

『小谷田異童傳』に記された、篤胤から『勝五郎再生奇聞』の写本を送られた勝五郎がそれを所持していたことなどは、一時期、篤胤の門人でもあった勝五郎のその後を考える上でも大きな資料的価値を持つと言える。

江戸期の世間話について考える際に、現代における調査研究の動向について述べてきたのは、単なる寄り道ではない。以上に述べてきたような、現代的においての転生譚への興味関心が、本稿で考えようとしている《怪異》の問題には、深く関わってくるのである。この問題については、後ほど述べることにする。

三 聞き方、書き取り方―知識人たちの態度―

冠山、篤胤らの調査や執筆活動と相前後して、勝五郎の噂は更に多くの知識人達の興味関心の対象となっていく。勝五郎に関する記事は、江戸随筆をはじめとした多種多様な記録類に残されており、当時この噂が、いかに知識人の耳目を集めていたかが分かる。

たとえば、勝五郎が前世について語り、騒動が捲き起こった翌年のこと。中野村を知行地とする多門伝八郎に連れられて勝五郎が江戸に上がった際には、複数の知識人が勝五郎との面会を希望しており、勝五郎は幕臣の荻野梅塙という人物の邸宅にも来訪していた。このことは、肥前国平戸藩主だった松浦静山（二七六〇―一八四一）による大部の随筆『甲子夜話』正篇卷二十七の五「八歳の児その前世を語る事」に明らかである。³³

この頃、生れ替りてこの世に来れる小兒と人の云はやすことあり。文政六癸未年四月、多門伝八郎知行所百姓之倅、生替り前世之事共^{おぼえを}覚居物語致候奇談、所々専之風説故、右百姓親子共、伝八郎方え呼出^{ただし}糺候所相違無^し之、未曾有之珍事故、同人組頭衆迄耳打申達候書付写（中略）隣宅の梅塙がもとに多門が連れ来れるま、予に見るべしと告たれど、幽冥の談を云者を見るべくも非ざれば往かず。人を

遣して見せたるに、書記して復命す

この記事は、静山隣宅の萩野梅塙おぎのばいろうの家に勝五郎が来た際、梅塙が静山を呼びに来たことを記している。しかしながら、怪異奇聞をこよなく愛する静山はこれを見に行かず、遣いを出して記録をとらせるに留めている。静山のこうした記録態度には、静山と旧知の間柄だった林大学頭述斎が危険視していた平田篤胤と勝五郎との関わりが影響していたものと考えられる。興味深いのは、勝五郎との直接の面会を拒んだ静山が、遣いをして記録をとらせ、さらに自らの筆でそのいきさつを記録しているという複雑な様相である。

また、続く正篇卷二十七の六は「同前又一冊」と題して、某老侯より借りたという『武蔵国中野村再生勝五郎前世話』の内容を収める。某老侯とは、静山と交流のあった池田冠山だと推察される。

某老侯より一冊を示さる。前事なれども、小異、詳文とも覚ゆれば又載す。要するに冥怪のみ。武蔵国中野村 再生勝五郎前世話（中略）去年十一月の頃、勝五郎、姉ふさとたんぽにて遊びながら、勝五郎、姉に向ひ、兄さんはどこからこつちの内に生れてきたとふ。姉どふして生たうまれ先がしれるものかといへば、勝五郎あやしげなる体にて、そんならおまへも生れぬさきの事はしらぬかといふ。姉、て

まへはしつてゐるのか。おらアあの程久保の久兵衛さんの子で、藤蔵といったよ。姉、そんならおとつさんとおつかさんにいおふといへば、勝五郎泣出し、おとつさんとおつかさんにいつちやうわるい。姉、そんならいふまい。わるい事するといつつけるぞよとて、其後兄弟げんくわなどすれば、かの事をいおふといふとじきにやめる事たびくなれば、両親是を聞つけ、いかなる悪事をなせしやとあんじ、娘ふさにせめとひければ（中略）近頃村中には、勝五郎といはずして、ほど久保小僧とあだ名よび、近村より見に来る人もあれば、はづかしがりて、やにはににげかくる、により、勝五郎直ばなしは聞こえなはず。祖母のものがたりにて此を書とむるものなり。（後略）

静山は「某老侯より一冊を示さる。前事なれども、小異、詳文とも覚ゆれば又載す。要するに冥怪のみ」と、ここでも冷やかな態度をとっている。静山は勝五郎自体ではなく、その背後にいる篤胤との関わりを避けようとしていたように思われる。

ここであらためて、勝五郎をめぐる知識人たちの紹介を行っておこう。平戸藩主を辞して後の松浦静山は、本所の下屋敷で過ごすことが多かった。その隣宅に、平田篤胤のもとに寓居する天狗小僧寅吉の異界体験を否定して、激しい論争を繰り広げた萩野梅塙が住んでいたのである。ちなみに、この論争は篤胤『仙境異聞』に記録されている。

天狗小僧寅吉（仙童寅吉）とは、天狗に連れられて山中の異世界へ行き、神通力を身につけたと公言する少年である。親元を去って、はじめは山崎美成の元にいたが、幕府右筆の屋代弘賢からこの話を聞いた平田篤胤は寅吉に強い興味を示し、半ば強引に自らの屋敷へと連れ帰ったのである。そして様々な問答を重ねた上で、天狗の世界の詳細な記録『仙境異聞』をまとめた。

仏学に長じた博識の幕府天守番であった荻野梅塲は従来あまり着目されてこなかった人物だが、勝五郎や寅吉といった（怪異）体験者をめぐる知識人たちの態度を考える上では、非常に重要な位置にいたと言える。屋敷が梅塲邸と隣り合わせていた静山との交友関係をはじめとした幅広い人脈を持ち、江戸後期の風俗百科辞典とも言うべき『喜遊笑覧』著者の喜多村筠庭、長編合巻『修紫田舎源氏』著者の柳亭種彦らとも友人であった。

鳥取藩支藩の隠居大名である池田冠山もまた、静山と親しい間柄にあった。愛娘の露姫を藤蔵と同じ疱瘡で亡くしていたことから、勝五郎に強い興味を抱いて直接聞き取りに赴いたようである。しかしながら、物怖じした勝五郎が直接話そうとしなかったので、祖母から聞き取りを行い、調書の内容と併せて『勝五郎再生前世話』を著すと各所に配ったのである。

平田篤胤は、幽冥界研究に努めた国学者である。文政六年、勝五郎が江戸に来ていることを聞き、合計三日にわたって、勝五郎を自宅に呼び寄せた。勝五郎は話すのを嫌がっており、篤胤の妻や娘が少しずつ彼の心を開いていった。最後の日に勝五

郎は、誰も聞いていないところなら話すと言ったので、庭の片隅で話を聞くことが出来たのだが、この時、篤胤は物陰からそつと話を聞いていた。その場にいた伴信友がまとめた原稿をもとに、篤胤は『勝五郎再生記聞』を著したのである。

勝五郎の前世語りに基づく、藤蔵から勝五郎への転生譚は世間話に分類され得るものである。その一方で勝五郎の転生譚は、公的資料を含む様々な文献に記載されており、他の転生譚とは一線を画す資料性を備えている。ただし、公的資料に記録されたことは、直接、当時の役人が転生を「事実」として認めていたということの意味しない。それはあくまでも、現在進行形で世間を騒がしている風聞の記録、という意味を持つ公的文書なのであった。

勝五郎の転生騒動の発端を一言であらわすと、勝五郎少年による、本人が知り得ないはずの事実を含んだ過去語り、ということになる。勝五郎の前世語りが共同体によって一応は肯定的に捉えられた時、「転生」という可能性が生じたのである。

逆に言えば、プレ勝五郎たる武州程久保村の須崎藤蔵は、この件に関して一言も語っていないわけである。没後の藤蔵は、勝五郎に（前世）の記憶として語られる情報としてのみ存在している。ここには、なぜ世間話における転生譚の多くが前世語りというかたちで発生するのか、という普遍的な問題も含まれる。多くの人が、未だ来たらぬ来世を語るのではなく、すでに過ぎ去った前世を語るのはなぜか、という問題である。

ごくシンプルに言えば、過去に死んだ者の情報は遡及可能だが、これから生まれる者の情報は調べようがない。合理的に考えるならば、何らかの方法で過去に死んだ者の情報を得て、それを自己の過去の記憶と混同して語る、という可能性を想定できるだろう。あるいは、いくつかの断片的な偶然の一致を核として、共同体が転生譚を紡いでいく可能性も否定できない。

篤胤を中心とするサロンの集団などは、寅吉を核に据えて「幽冥界」をめぐる壮大な共同幻想を織り上げていた。そこまではないしろ、勝五郎を囲む共同体にも、同様の力学を見出すことができるかもしれない。しかし、それも単なる推論に過ぎないわけで、結局、こうした再現性の低い問題に関する決定的な解釈は施しようがないのである。それは当時も現在も、そして未来においても変わらない。

四 江戸期の「転生」観——怪異が常識か——

江戸期において人間の「転生」は、ときに勝五郎のように世間を騒がせた世間話となるほか、仏教説話における寓話あるいは実説としても広く語られていた。また、勝五郎の転生譚は該当地域の領主たる旗本、多角による調査対象となつて公式文書が作られ、役人に報告されていた。

ただし、すでに述べたように、公的な記録という「書き取り方」が為されたからといって、このことは必ずしも当時の役人

がこれを実説として認めていたことには繋がらない。領主および役人としてはあくまで世上を賑わす風聞に関する調査報告の義務から、勝五郎の一件に関する調査を作る必要があつたわけである。

この問題に関する同時代的な状況を確認するため、赤毛犬「とち蔵」の転生をめぐる世間話が生み出した騒動と、これに対する役人の対応を見てみよう。⁽⁵⁾ 該当の騒動を記録するのは、前出の松浦静山『甲子夜話続編』巻六七の一八である。そこには、飛騨の国、益田郡萩原町村の名主が高山の陣屋（役所）へ行つて報告した、罪人が赤毛犬に生まれ変わったという転生の記録が載っているのである。少し長くなるが、以下に引用する。

遠国の御代官手代が、役さきより贈れりと云書通を示す者あり。事は其文を見て知るべし。又和漢同じきを綴贈す。

宮寺様

中嶋様

ますは

鳩来庵様 御順覧

飛騨国益田郡萩原町村名主熊崎宇左衛門飼犬、赤毛之大犬に而、とち蔵と名付〔赤毛に黒み有^レ之、柄の実の色に似候とて、如^レ此名付候より〕、今年八歳計に相成候処、近頃老病に臥居候得共、平生温和なる犬に付、人々いたはり、食物等与へ置候処、当五月下旬、右宇左衛門老母昼寝之節、枕上に立申候は、某事、昔人間に有て、同国同郡中呂村曹

洞宗禪昌寺に奉公せしが、ある時風と出来心して、祠堂之紬一疋五丈八尺式寸有けるを盜取、代金貳歩貳朱に売払、酒食に遣捨けるが、其罪にも候哉、畜生道に入、先非を悔

といへども、其詮なし。幾度も犬に生れ、漸此頃に至り少し罪亡びたれば、此上の憐みにて、主人宇左衛門より禪昌寺へ侘言いたし呉候はゞ、来世は人間にも生れ可申と、枕もとに手をつき一向に頼と見て夢さめ、不審更にはれず、悴宇左衛門に物語、取あへず禪昌寺へ人を遣し、先年かうくゝの事有之候哉と尋させ候処、五十年程以前住持法考之節、下男とち藏末期に至り盜致し候義、白状致し候記録有之旨、当住持申聞、猶同日同時、右下男とち藏家元、子孫又甥かに当り候中呂村百姓、名未_レ糾、同様之夢を見候迎、是も同じく今日只今其事實を尋可_レ申と寺へ參落合候由、住持申候は、然る上は全く人間之再来に可_レ有_レ之、先先罪はゆるし可_レ申に付、心残さず成仏せよと申聞せ、命終候はゞ、愚僧參り、引導いたし可_レ申旨申聞候段、同村名主伊佐地彦兵衛、当六月八日高山陣屋へ罷越申聞候事。(後略)

記されているのは、おおよそ以下のようなことである。飛騨国、萩原町の村名主に熊崎宇左衛門という者があり、「とち藏」という名の赤毛の犬を飼っていた。その名は、犬の毛色が栃の実の色に似ていた為に名付けられたものという。この犬は、八歳頃から老化により病みついていたが、日頃から温和な性格

だった為、人々に労われ食物などを与えられていた。そんな五月の下旬、宇左衛門の老母が昼寝をしていると、とち藏が夢枕に立つて次のようなことを述べた。

自分は昔、人間であり、禪昌寺に奉公していた。ある時ふとした出来心から祠堂の紬を盗み、これを売り払って酒食に使ってしまった。その罪のせいか畜生道に入って何度も犬に生まれ変わっているが、最近ようやく罪も薄れてきた。主人の宇左衛門から禪昌寺に侘びをしてくれば来世は人間に生まれ変わることも出来よう。そう言つて、とち藏が枕元に手をついたところで夢が覚めた。不審に思った老母はこのことを息子の宇左衛門に話し、また禪昌寺へも人を遣わした。

すると不思議なことが分かった。五十年ほど前、下男の「とち藏」という男が死ぬ前に過去の盗みを白状したという記録があるというのである。また、そのとち藏の親戚に当たる百姓も同じ日、同じ時刻に同様の夢を見ており、それが事実かどうかを確認しようとして寺にやって来たところだった。禪昌寺の僧は、これだけのことが重なるからには、その犬はまさしく人間が生まれ変わったものであらうと言った。そして、かつての罪は許すから心残りなく成仏せよ、臨終の時には自分が引導を渡してやろうとも告げるのであった。

話の内容も興味深いが、ここで重要となるのは、引用箇所が転生譚をめぐる公的な記録であるという点である。ただし、公的な記録に記載されたからと言って、転生が役所のお墨付きを

得たということには直結しないだろう。世間の風聞を取り締まる意味でも、世情を賑わす噂に関しては、調査・報告が行われていたためである。

前近代の寺院においては、仏法を説くための唱導として、犬と人とを結ぶ転生譚が広く説かれていた。江戸後期には、こうした仏教唱導に基づくとおぼしい転生譚（事実として語られる）が、次第に抹香臭さを薄めた単なる世間話としても広がっていた。

しかしながら、転生をめぐる世間話の受け手がみな、こうした話を信じていたわけではなかった。（怪異）として捉えることが可能な、特定の不可思議な話があったとして、その話の受け手によって信じるか否かの態度は異なっていたのである。では、江戸期における生まれ変わり、とくに勝五郎の転生は（怪異）と呼ぶべきものであったのであろうか。以下、先行研究を補助線としつつ、再考していきたい。

五 語り方、聞き方―勝五郎の態度、大人たちの態度―

転生騒動の発端は、勝五郎による自発的な語りであった。はじめはごく自然に、自ら姉に語っていたのである。ところが姉に語りの内容を疑問視されたことから、語り洩るようになってしまう。姉から話を聞いた両親や祖母に訊ねられた時にも、最初は積極的に語ろうとせず、強いて請われたことにより語ることになる。

その後、勝五郎の話を受け止めてくれた祖母とともに藤蔵の生家を訪れた際には、藤蔵の家の者たちの前で、積極的に前世の記憶を語っている。ところが、勝五郎の生まれ変わりが騒動を生み、知識人の聴取を受けるようになってからは、またもや語り洩るようになるのである。

勝五郎は、騒動の発端となる自主的な語りから、家族との対話、藤蔵遺族との対話、中野村での騒動、江戸の知識人を巻き込んだ騒動を経ることで、語りに向かう態度をその都度、変化させている。

勝五郎にとって「藤蔵だった頃の記憶」、「あの世の記憶」、「勝五郎に生まれ変わる時の記憶」は、おそらくは自らの「体験」を語ったものであったと言えるだろう。しかしながら、この体験を珍しいこととして周囲の大人達が聞き出そうとすると、語り洩るようになるのである。さらに、一面識もない都会の知識人たちが関わってくるようになると、より一層、語りたがらないようになる。勝五郎にとっては普通だったこれらの記憶を語ることで、周囲の認識とのズレが露わになり、それに伴って語りがなくなっただけのものかと思われる。

語りという行為が語る者と聞く者との共同作業である以上、聞く行為が語る者の「語り」に向かう姿勢を変化させることにもなるわけである。勝五郎の場合、積極的に聞こうとする者に対しては、口を閉ざす傾向にある。逆説的な事例としては、戦後、登戸研究所について頑なに沈黙を守っていた元研究員たちが、近現代

史を知らない高校生たちの訪問調査によって態度を変化させて語り始め、のちに自ら筆をとった例なども想起される⁶。

勝五郎の場合は、大人が子どもの語りを聞くようにしていた。一方の登戸研究所元研究員の場合は、子どもが大人の語りを聞くようにしていた。年齢差などの、聞く者と語る者との立場の差なども、個人的な体験の聞き取り方に関してはある種の意味を持ってくる。こうした両極端な二つの事例は、聞き取りの難しさと可能性を示しているようにも思われる。

また、勝五郎の転生譚に関しては、書き取り方、すなわち記録に向かう姿勢も、知識人によって自ずから異なっていた。それは、公的な文書と、啓蒙書（篤胤、冠山など）、風聞の記録という姿勢の強かった随筆（静山など）とでは、なぜ記録するかというモチベーションに大きな隔たりがあったためである。

勝五郎の語りに向かう姿勢の変化は、様々な立場の「大人」たちとの干渉において発生してきたものであった。そこで思い出されるのが、柳田國男が戦後間もない昭和二十一年（一九四六）年に出版した『先祖の話』の中で、勝五郎について触れた部分である。

あるいは自分が生まれ替りであることを、まだ幽かに覚えて居たという話も時には有る。百年と少し前の頃、八王子附近の村にあった事実として、江戸の閑人たちに騒がれた勝五郎再生談などは、五つになる男の児が誰にも言っちゃ

いけないといつて、そつとこの秘密を姉だけに語った。それが二親の知るところとなつて、尋ねて行つてみると二三里も離れた村に、果たしてその児のいう通りの家があり、その前世の児の名も符号して、もう疑うことが出来なかつたというような話である。作り話の流行した時代だといふから、うっかり証拠に引くわけには行かぬが、考えてみると是はもともと証明のむづかしい事柄であつて、当の本人が何かの拍子に、もしもそういうことを言い出したとすれば、もうそれだけでも信じないでは居られぬような、心理の素地とも名づくべきものは、却つて周囲の者の間にすでに備わつていたのである。

柳田は続けて、以下のような大変に興味深い経験談を述べている。そこには転生の当事者たる子どもたちの語りをめぐり、大人たちの「聞き方」に関する看過できない重要な情報が含まれているのである。

私などの生まれた村では、初の誕生日の色々の儀式の一つに、箕を以てその満一年の児をおおぎ、おまえは何処から来たと問うて見る行事があつた。幼児の使い得る単語の数は限られている。中にはワンワンだのモウモウだのいうので、笑つてしまうものも多かったろうが、もしもアツとかコツとか、墓所や氏神の森の方角を指すことがある

と、人々は顔を見合わせずにはいなかったのである。前の生ということは、しばしばこの世の人の話題となり、それをまたかたわらにいて小兒も聴いていた。彼等の思いかけぬ言葉に注意を払い、また何かの折に言わせてみようとする風が、近い頃までは我邦には盛んであった。

柳田によるこうした指摘は、小兒による前世語りが、ときに周囲の大人たちという「聞き手」によって誘導されたものでもあったことを示している。また、幼い子どもが、単に「幼い子ども」という意味を越えた、神や先祖の意識の宿り得る神聖なる「器」としても認識されていたことが窺えるのである。勝五郎の転生譚を考える上でも、勝五郎による前世語りの展開に際して大人達が果たしていた役割に注意しておく必要があると言えよう。そこには、語りをめぐる「聞き方」の問題が内包されている。

また、当然のことではあるが敢えて付記しておきたいのは、勝五郎と違って藤蔵は転生について語る口を持たないという点である。転生騒動は藤蔵没後のことなので、騒動の際には、藤蔵は語られるのみの存在なのである。勝五郎の語りを藤蔵の語りとして捉える在り方は、勝五郎の語りに信を置いた場合にのみ成立可能な観点なのであり、そうした立場を取らない場合には、藤蔵は語られるのみの存在ということになる。

六 総体としての〈怪異〉をめぐって

特定の転生譚という同一の話題であっても、語る者、聞く者によって、信じるかどうかの態度は異なる。江戸期には、生まれ変わりを仏教的な一種の常識として処理する思考もあれば、極めて珍しいものの実際にあり得る現象として捉える見方もあり、あるいは否定すべき非合理的なものとして排斥する姿勢もあった。

すなわち、犬と人との転生譚や、勝五郎の転生譚は人によってそれぞれ、当事者としての体験談、常識の範疇にある現象、珍しいが信すべき証拠を揃えた現象、真偽不詳の世間話、取るに足らない妄説、等々の様々な受け取り方をもって捉えられていたのである。それらの異なる姿勢に基づく言説の集合体を分析するに際して、本稿では総体としての〈怪異〉という視座を用いてきた。

では、先行研究において怪異はどのようなものとして整理されてきたのであろうか。まず、「怪異」は「妖怪」と近い語であるものの、両者の間に明確な線引きは存在しない。作家の京極夏彦などが指摘してきたように、どちらかと言えば「怪異」はコトすなわち現象を意味するものとして用いられ、「妖怪」はモノすなわち存在を意味するものとして用いられてきたのである。

文化人類学者・民俗学者の小松和彦は、不可思議な物事を括

る用語として「妖怪」を設定した上で、その概念を、①出来事としての妖怪（現象―妖怪）、②超自然的存在としての妖怪（存在―妖怪）、③造形化された妖怪（造形―妖怪）の三段階の意味領域に分けた。⁸ 本稿で考えようとしているのは、①の「現象―妖怪」に重なる意味合いでの〈怪異〉であると言える。

怪異については、異なる視点からの整理も試みられている。日本史学をベースとする東アジア怪異学会は、史料に含まれる「怪異」の把握に際して、発会当初に西山克が提起していた以下の三類型を承け継ぐ。①昔、「怪異」とされていて今でも怪異と思えるもの、②「怪異」とされていないが昔の人も怪しいと感じたもの、③昔の人はそう考えていないが今の我々から見ると怪しい、怪異ではないのかと思うもの。⁹ 以上の三類型には、古記録に「怪異」と記されていたか否かという問題意識や、時代によって異なる常識の問題が包含されている。

先行研究における「怪異」（あるいは「妖怪」）の整理を踏まえた上で、東アジア怪異学会における怪異の三類型が言うところの「昔の人」や「今の我々」について考えを深めてみたい。本稿では、勝五郎の転生譚を題材として、江戸期の〈怪異〉体験者や一般層における媒介者、そして知識人たちの認識の差違について考察してきた。その結果、「昔の人」にも様々な立場や認識があったことが浮き彫りとなった。

さらに、こうした立場や認識の差違は、現代に生きる「今の我々」が扱う〈怪異〉の周辺においても、依然として残存して

いる。二十一世紀を迎えた現代においても、靈魂や転生の有無を信じるか否かは人によって異なるのである。たとえば、先に触れた勝五郎調査団の活動においては、生まれ変わりの真偽を問うことは目的としていないのであるが、調査団メンバー・活動への協力者・講演会における外部講師・講演会の聴衆たちはそれぞれ個々において、生まれ変わりの真偽をめぐる立場を異にしている。

「生まれ変わり」に関する講演を開きにくる聴衆の中には、研究者による靈魂や転生に対する肯定的な言説を求めている層も一定数、存在している。さらに過去の外部講師たちの中には、生まれ変わりの実証を目的とする研究者も複数名、含まれている。そして、転生を信ずる人々の認識において、勝五郎の生まれ変わりは決して怪異ではないのである。それが、本稿が勝五郎の転生を語るに際してカッコ付きの〈怪異〉を用いて来た所以である。

つまり留意しておくべきは、総体としての〈怪異〉という視座を求めているのが研究者自身――本稿で言えば筆者自身――だという点なのである。その場合も、研究に向かう姿勢として〈怪異〉を実際には存在しない物事だと判断しているからといって、他者との交流の場においても同じ態度をとっているとは限らない。

たとえば飯倉義之は「妖怪のリアリティを生きる―複数のリアリティに〈憑かれる〉研究の可能性―」において、一人の研

究者の、フィールドにおける振る舞いと研究上の姿勢との齟齬を自覚的に内面化していく方法論を提示している。本稿で考えている〈怪異〉をめぐる問題系も、自ずから飯倉による問題提起と呼応してこよう。さらに、研究者自身も一人の人間なのであるから、当然、幼少期から晩年にかけて〈怪異〉の周縁をめぐる問題への認識も変わるであろう。また、明確な信仰を持たない場合であっても、様々な人生の節目において、死者の霊魂の行方について想いを馳せるのはごく自然なことだと言える。

勝五郎の転生譚をめぐって多様な立場を示していた江戸期の人々と、勝五郎の調査にまつわる活動を通して交流を行う現代の人々とは、決して隔絶した存在ではない。こうした問題について考究しようとする行爲は図らずも、勝五郎の転生を〈怪異〉として括る筆者自身研究者としてのありようを逆照射することとなった。

池田冠山や平田篤胤がなぜ「転生」や「幽冥界」を希求していたのかという、人生の深いところに横たわる生死をめぐる問題は、現代において〈怪異〉の探求を行おうとする者にとって、も決して彼岸の課題ではない。聞く人によって語りへの態度を変えた勝五郎と、語る口を持たぬ藤蔵とは、このような普遍的な課題を現代の研究者に突き付けてくる。

注

(1) 本稿は第六十九回・日本口承文芸学会例会「〈怪異〉の聞

き方・書き取り方——〈口承〉研究の視点から——」における

同名の口頭発表をもとにしたものである(二〇一五年十二月五日(土)、於國學院大学渋谷校舎)。また論考の性質上、過去に発表した以下の諸論と内容的に一部重なる部分が含まれる。拙稿「勝五郎生まれ変わり物語の調査研究」勝五郎生まれ変わり物語探究調査団編『日野市郷土資料館ブックレット1 ぼくぼ小僧 勝五郎生まれ変わり物語』日野市郷土資料館、二〇一六年。同「江戸の知識人と〈怪異〉への態度——幽冥の談を軸に」東アジア恊異学会編『アジア遊学 怪異を媒介するもの』勉誠出版、二〇一五年。同「勝五郎の転生譚と江戸の知識人——前世語りから転生譚へ——」勝五郎生まれ変わり物語探究調査団編『ぼくぼ小僧 勝五郎生まれ変わり物語 調査報告書』日野市郷土資料館、二〇一五年。同「前世を辿る少年の旅路——転生勝五郎と八王子・日野の旧道——」『怪』第三九号、角川書店、二〇一三年七月。

(2) 勝五郎生まれ変わり物語探究調査団編『ぼくぼ小僧 勝五郎生まれ変わり物語 調査報告書』日野市郷土資料館、二〇一五年九月。

(3) 『甲子夜話』の引用に際しては平凡社東洋文庫本全二十冊に依拠する。

(4) 江戸の知識人と勝五郎との関わりに関する詳細は前出の拙稿「江戸の知識人と〈怪異〉への態度——幽冥の談」を

軸」を参照されたい。

- (5) 赤毛犬「とち蔵」の転生騒動については以下を参照。拙稿『犬の伊勢参りと転生』『日本文学研究誌』第七輯、大東文化大学日本文学専攻、二〇〇九年。

- (6) 一九八〇年代以降、長野県の赤穂高校、川崎市の法政第二高校それぞれの「平和ゼミナール」によって登戸研究所関係者への聞き取り調査が行われ、のちに元研究員の伴繁雄による『陸軍登戸研究所の真実』出版に繋がった（芙蓉書房、二〇一〇年）。詳細は以下を参照。『明治大学平和教育登戸研究所資料館ガイドブック』（明治大学平和教育登戸研究所資料館ブックレット）。

- (7) 『定本柳田國男集』第十巻、筑摩書房、一九六九年。

- (8) 小松和彦『妖怪文化入門』角川書店、二〇一二年（せりか書房、二〇〇六年初出）。

- (9) 東アジア怪異学会『怪異学入門』岩田書院、二〇一二年。

- (10) 飯倉義之「妖怪のリアリティを生きる―複数のリアリティに（憑かれる）研究の可能性―」『現代民俗学研究』第七号、現代民俗学会、二〇一五年三月。

（いまい・ひでかず／国際日本文化研究センター）

【第六九回研究例会（怪異の聞き方書き取り方―口承研究の視点から）

怪談を束ねる

―明治後期の新聞連載記事を中心に

一柳 廣孝

はじめに

明治期に新たな言説の場として発展しつつあった新聞メディアは、明治三十年代半ばになると積極的に怪談を取り上げ始めた。長らく幽霊や妖怪は前時代の迷信の象徴として排斥の対象とされてきたが、かといつて怪異に関する話題が消え去った訳ではない。巷で語られるトピックとして、読者は怪異を扱った記事に関心を抱き続けていたようだ。^①恐らくそこには、上から押し付けられた「文明開化」に対する庶民の違和感も反映していただろう。

ただこれらの怪異は、あくまで新しい世になつてもなお残滓をとどめている迷信の現われとして処理されてきた。ではなぜ、新聞メディアは怪異に関する記事を掲載し続けたのか。庶民への啓蒙のためか。それとも彼らの怪異に対する尽きせぬ興味を満たすためだったのか。ならば怪異は、新たな価値観に身を包んだ知識